

※イラストはイメージです。



Special Interview

樋口 和秀 教授
大阪医科大学附属病院[消化器内科]

ひぐち・かずひで 1982年大阪市立大学医学部卒業。98年同大学講師、2002年同大学助教授などを経て、07年、大阪医科大学内科学II教室教授に就任。15年、大阪医科大学三島南病院院長補佐。17年より日本内科学会理事。

消化器の検査治療に欠かせない内視鏡。従来のチューブ状の機器は、飲み込むときなどに苦痛を伴うのがネックだった。そこで考え出されたのが、小指の先ほどの大きさで自走するカプセル式の内視鏡だが、胃の検査には使えないなどの弱点があった。食物を送り出すぜん動運動を利用できる腸などは違い、袋状の胃の内側を検査するためには、カプセルの位置や姿勢を自らきめ細かく制御する必要があるからだ。その手法を確立できないと、病変部を見落とすってしまうリスクがある。

2011年、試行錯誤の末に樋口は、龍谷大学理工学部などと共同で磁石を組み込んだ尾ビレをゆらゆらと動かし、魚のように胃の中を泳ぐ新しい発想の内視鏡プロジェクト「マーメイド」を発表した。着想から5年、世界も注目した大きなニュースだった。カプセル式内視鏡の開発は、イスラエルのメーカーなどが先行していた。後発の不利を承知で研究に乗り出した動機は、患者の苦痛を少しでも取り除きたいという一念だった。「カプセル一つを飲み込むだけで、食道から大腸まで全部検査できるようになれば、苦痛や負担は大きく軽減できるでしょう」。臨床、教育に追われる多忙な日々の中で研究を積み重ねてきた。マーメイドは、「初泳ぎ」以降も進化を続けている。小型の磁気共鳴画像装置(MRI)のような装置で、体外から磁気を当て、当初は2次元でしかコントロールできなかったカプセルを、3次元で制御することができるようになった。早ければ2〜3年で広く使われるようになる見通しという。さらに小型化できれば、消化器だけではなく血管内などの検査治療にも応用できる可能性がある。将来性に期待する。それでも、「現状に満足せず、常に新しい治療法の開発や病態の解明に取り組むのが大学病院の役目です。医療を進歩させる最先端にいないければ、存在価値はない」。



「マーメイド」は水と一緒に容易に飲み込める

ゴッドハンドより患者と向き合い多くの命を救う技術

そこにあるのは、単なる知的好奇心や功名心ではない。「ゴッドハンドと呼ばれるような優秀な医師を育てるのも大切ですが、多くの医師が同じ成果を一律に上げられる技術や手法を確立することが、患者を救うために本当に必要なこと」と断言する。

研修医のころ、体調を崩して1年以上入院した。仲間が医師として経験を積み、成長していく時期に、自分だけが取り残されていくような焦りの日々。復帰後は努力を積み重ね、内視鏡の専門家としての評価を得るに至った今に對しても、もったも満足していないのは、あるいは樋口自身なのかもしれない。

医療機器や治療法の進化などにより、検査治療できることは増えたが、いくら検査をしても原因がわからない疾患は、現代のようなストレスフルな社会では増えているという。「内科は患者と向き合うのが原点です。時間をかけて悩みを聞き、その上で最新の医療を切り開いて治していかなくはならない」。マーメイドがいくら進化しても、内科医としての樋口の仕事に、終わりが訪れることはなさそうだ。

磁気で制御する
自走式カプセル開発
胃内を3次元で遊走

消化器系疾患を主に扱う大阪医科大学内科学II教室の樋口和秀教授は、10万件近い症例に向き合ってきた内視鏡のスペシャリストだ。常に患者に寄り添い、新たな技術や治療法を模索する姿勢は、困難な場面ほど強さを発揮する。

理想の内視鏡へ歩みを止めず

医療フロントライン
Frontline Medical Care